仲間と社会を繋ぐ「だいじょうぶ」の力

梶中学校　三年　宮﨑　一成

たった五音の魔法の言葉。

私は現在、野球をしています。自分がミスをして落ち込んでいる時、グラウンドに響く仲間からの「だいじょうぶ」という一言ほど、苦しい時の自分を救うものはありません。この作品を通し、私は苦しんでいる人や困っている人に温かい声をかけることと「チーム」の大切さを強く実感しました。「だいじょうぶ」というこの言葉は、一人で唱えるより、信頼する仲間からかけられたときの方が何倍も心に響き、自分の気持ちを切り替えることが出来ます。

野球は一人ではできないスポーツです。攻守どちらにおいても、自分一人で試合を動かすことはできません。だからこそ、試合の中で自分がエラーをしてしまったり、思うようにいかず絶望的な気持ちになる瞬間があります。そんなとき、下を向きかけた私の背中を叩いてくれたのはいつもチームメイトでした。

「だいじょうぶ」「切り替えろ」という温かい声に、私は少し気持ちが楽になり、次は頑張ろうと思いました。この作品でも、チームメイトが互いに支えながら次々と困難を乗り越えていく姿が生々しく描かれており、自分の経験と重なりました。

作中で最も印象に残っているのは、「一人では無理でも、チームなら乗り越えられる」という言葉です。私はこれまで、自分のエラーが原因で試合の流れを断ち切ってしまい、ベンチで一人落ち込んでました。そのとき、チームメイトが駆け寄ってかけてくれた言葉や、さりげなく肩を叩いてくれた温もりによって、孤独感から救い出された経験があります。これからも、私はミスを恐れずに仲間と声を掛け合い、痛みを分かち合って共に前を向くことでどんな壁も乗り越えられると思います。そして、自分自身も仲間が困っているときに「だいじょうぶ」と言って支えられる選手になりたいと思いました。

しかしこの作品から得た学びは、グラウンドの中だけに留まりません。私は読書を進めるうちに、クローン病をはじめとする、まだ治療法が見つかっていない難病やあまり知られていない病気についても考えるようになりました。病気になった人は、体の辛さだけでなく、周りに理解してもらえない苦しさや不安を抱えていることもあると思います。

私も小さい頃、お腹の病気にかかり、なかなか原因がわからず、何度も何度も病院を受診した経験があります。その経験があるからこそ、病気の原因が分からない不安や苦しさを抱える人の気持ちを少し身近に感じることができました。だからこそ、病気の治療法がもっと見つかり、一人でも多くの人が安心して生活できる社会になってほしいなと思いました。そして、現代社会に対して強く願うことがあります。それは、難病の治療法や研究が進み、一人でも多くの人が安心して日常を送れる社会になってほしいことです。それと同時に、病気のある人を「特別な存在」としてみるのではなく、困っている人がいたら多くの人がその人の気持ちに寄り添い、助け合える社会であってほしいです。

私も、チームテスならだいじょうぶだという言葉のように、誰かが辛い時や困っている時に「だいじょうぶ」や「切り替えろ」など

誰かの背中を押してあげられるような声をかけて、支えることのできる人になりたいです。

野球のチームがそうであるように。社会全体もまた一つの大きな「チーム」なのだと思います。一人では到底解決できないような大きな病や苦しみであっても、社会全体が手を取り合い、温かい言葉を掛け合うことが出来れば、一人では乗り越えられないことを乗り越えていけるはずだと思います。この作品のタイトルにある「チームテスならだいじょうぶ」という言葉は、野球の仲間たちだけでなく、社会の中で生きる私たち全員に向けられたメッセージだと感じました。私はこの作品を読んで、特に「チーム」の大切さと「だいじょうぶ」の声かけについて学べました。

一人では治療できない病気をみんなで力を合わせることで、どんな困難も乗り越えられる大きな力を生み出すことができると思います。「チームテスなら乗り越えられる」協力がとても大切なことだと学びました。もう一つは誰かが落ち込んでいる時に明るい声かけをすることや「だいじょうぶ」と言って寄り添える人間になりたいです。明るい声かけと、お互いを思いやる協力の心が辛い人に少しでも安心してもらえると思いました。この二つを学び社会が良くなって、優しい人が増えてほしいです。私もこれからの学校生活や野球、そして将来の社会生活の中で、誰かの背中を押せる温かい存在であり続けたいと思います。

命のバトンをにぎりしめて

庭窪中学校　一年　松村　花

普段、当たり前のように過ごしている日常の中で、「自分が今ここに存在している理由」について、深く考えながら生きている人は、どれほどいるだろうか。きっと数少ないと思う。私は、周りの大切な人たちや、災害にあった方々の命については深く考えたことがありました。ですが、自分自身の命の重みについては、これまであまり目を向けていませんでした。何よりも大切にするべきな自分の命を、どこか他人事のように捉えていたことに気付かされました。この本は、そんな私に、今、自分が生きているということに、どれほど多くの奇跡が重なっているのかを教えてくれました。そして、私は、目に見えない無数の先祖への感謝を心から感じます。

もうすぐ二児の父になる秀平は、経営する塾が上手くいかず不安な日々を過ごしていました。そんなある日、口にすると先祖の人生を、夢で追体験できる不思議なあめ「ルーツキャンディ」を手に入れます。戦中戦後の過酷な時代を必死に生き抜いた、数えきれないほどの先祖の選択、そして命をつなぐための強い決意を知った秀平は、自分が今ここに生きている奇跡に気付かされます。先祖からの大きな愛や覚悟に触れたことで、秀平は未来の我が子や、塾の先徒たちへ「命のバトン」をつなぐ勇気を取り戻していく物語です。

私が、この物語で一番心に残っているのは、この本のサブタイトルである、「あなたはどこから来たのか、そしてどこへ向かうのか」という問いに対する、本当の答えにたどり着く場面です。ルーツキャンディを通して、最初は、過酷な戦時下や、苦しい貧困といった夢に戸惑い、苦しんでいた秀平が、その辛い過去の先に、今の自分の命があるという奇跡を知ります。そして、自分自身の命が決して自分だけのための命ではないことに気付かされるのです。この場面を読んだ時に、私も、今あるこの命は、どんなに辛く苦しい現実があっても先祖の誰一人として命を投げ出さず、命をつなげてくれたからこそあるものなのだと、気付くことができました。

もしも私が、先祖たちが生きたその時代に生まれていたら、彼らのように強く、誰かのために生き抜くことができたでしょうか。今までの暮らしが一瞬でこわれるという怖さや、周りの大切な人々が次々に離れていくという辛さに負けて、立ち止まっていたかもしれません。私は、学校で、何度も命について学んできました。世界で唯一日本に落とされた、原子爆弾。たった一瞬で、当たり前の暮らしと共に、広島では、約一四万人もの命が、奪われました。それまで必死につないできた命のバトンが一瞬にして途切れることもあるということに、私は強いショックを受けました。世界には、まだ目を背けたくなる現実が、たくさんあります。ですが、それを他人ごとにせず、自分ごとにすること。そして行動することが、命の尊さを知った私にできることです。きっと私の先祖も、病気や戦争などの数々の辛い思いをしてきたと思います。しかし、数え切れないほどの先祖が、誰一人として命を諦めず、自分のため、誰かのため、大切な人のために、生き抜いて、バトンをここまでつなげてくれました。私の命が、何よりも証拠です。父や母だけでなく、目に見えない無数の先祖たちの、強い決意があったか

らこその、今の自分の命があるということを忘れず、まずは何よりも、その命を大切にしたいと思うようになりました。

今までの私は、嫌われるのがこわくて、どんなに仲良くても、自分の気持ちに蓋をしてしまったり、悩みを相談できないことがありました。部活で思うように音が出ないときや、どんなに勉強したって一番にはなれないというとき。自分自身が自分のことを傷付けてしまうことがよくありました。しかしそれは、逃げることのできない戦争や、災害を乗りこえ、つないでくれた命の使い方として、間違っていたんじゃないかと考えるようになりました。自分のことを好きになるということは、そう簡単なことではありません。しかし、自分の命は絶対に、何よりも大切にするべきだと、この本が教えてくれました。自分の命は、自分だけのものではありませんが、守れるのは、自分自身しかいません。自分の可能性を信じて、精一杯楽しんで生きることが、命がけでバトンをつないでくれた先祖たちに感謝を伝えられる、唯一の方法なのではないのでしょうか。

私たちは、誰もが、どこからか来て、どこかへ向かう道の途中を生きています。そして、たくさんの思いが詰まった命のバトンをにぎりしめています。時に立ち止まっても、後ろ向きになっても、自分のルーツに誇りを持ちながら、人生を精一杯前に向かって走り抜くべきだと思います。